

「ことばの教室」における保護者とのかかわり（2） － 保護者に対するアンケート結果から－

小林 倫代・久保山 茂樹

I. はじめに

保護者は、我が子にことばの遅れがあるということを学齢になる以前から気付き、不安を感じながら子育てをしている。このような状況にいる親子の相談の場として、地域によっては「ことばの教室」がある。また、子どもが学齢になり、ことばに障害があると判断された場合も「ことばの教室」に通うことになる。こうした「ことばの教室」の役割は「子どもの指導」にとどまらず「保護者への対応」「連携」「情報提供」であると考えられている（小林・久保山, 2001)²⁾。

また、平成15年3月に報告された「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」⁷⁾の「質の高い教育的対応を支える人材」の中では、「家庭において、教育はもちろん生活全般で障害のある子どもに幅広くかかわる保護者は、重要な支援者の一人である。（中略）保護者に対して相談や情報提供を通して適切な支援を行うとともに、一般講座やセミナー等の開催を通じて保護者の理解、啓発の促進を図っていくこと（略）」というように、保護者が子どもの支援者となる役割を明示すると同時に保護者への支援の必要性を述べている。

子どもの生活の基盤を整え、生活のスタイルを作り上げていくのは子どもを養育している保護者であり、担当者がその保護者と適切なかかわり合いを持つことは、子どもの教育的なかかわりをすすめる上で重要である。上述したように「ことばの教室」担当者は、通ってくる子どもの指導とともに保護者との対応も求められている。そこで本稿では保護者からの意見を踏まえて、担当者と保護者とのかかわりについて検討する。

II. 目的

子どものことばに関することで、多くの保護者は子どもに付き添って「ことばの教室」に通ってくる。上述した「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」でも述べているように、保護者は子どもの支援者となりうるが、担当者には保護者への支援をも視野に入れた対応が求められている。

保護者は、子どもが「ことばの教室」に通級を始めたころ、どのように思いながら子どもとともに通ってきていたのか、また、現在では、どのように思っているのかという、保護者の気持ちを受けて担当者と保護者とのかかわりを検討していくことは重要であると考える。そこで通級をしきじめたころの保護者の気持ちと現在の保護者の気持ち、担当者の言動で励まされたことや傷つけられたことを調査によって明らかにし、保護者が担当者とのかかわりをどのように感じているのかを踏まえて「ことばの教室」担当者が、保護者とかかわる際の留意点を明らかにすることが本稿の目的である。

III. 方 法

1. 対 象

調査対象は、東北地区1・関東地区3・近畿地区1・中国地区2校の合計7校の難言学級・通級指導教室に在籍・通級している児童の保護者260名である。

2. 手 続き

平成13年9月に各学校にアンケート用紙を送付し、担当者から保護者への配布を依頼した。アンケート用紙には返信用封筒を同封し、郵送によりアンケート用紙を直接回収した。

3. アンケートの概要

質問の内容は、①指導開始当初の指導担当者との関係、②担当者との話し合いの中で傷つけられた言動、③担当者との話し合いの中で励まされた言動、④ことばの教室でよかったですと思われる施設・設備・教室環境等、⑤今の担当者や担当者との関係であり、①から⑤の全ての質問に自由記述で回答を求めた（資料参照）。

IV. 結 果

1. 回答の概要

回収されたアンケートは126件（回答率48.5%）であった。対象となった子どもの年齢は図1に示すように、3歳から中学1年生までであった。

全体の男女の割合は、図2に示すように男子81人（71%）、女子37人（29%）であった。

障害別内訳は、図3に示すように、言語発達遅滞（42%）、構音障害（32%）、吃音（8%）、口蓋裂（4%）、難聴（11%）、その他（3%）であった。

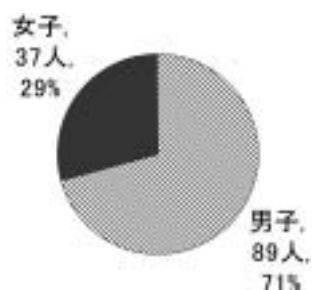


図2 全体の男女比

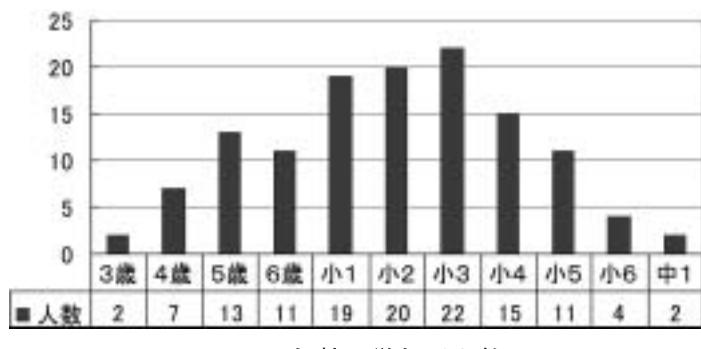


図1 年齢・学年別人数

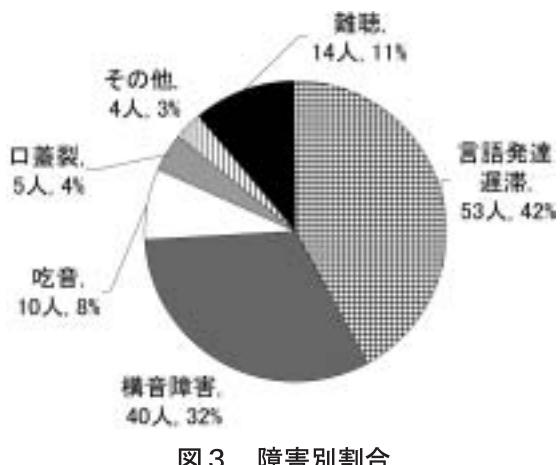


図3 障害別割合

2. アンケートの結果

1) 指導開始当初の指導担当者との関係

「お子さんが『きこえことばの教室』に通いはじめたころを振り返り、担当者とかかわるときに感じたことをお書き下さい」という質問に対して、126名中、119名から回答があった。保護者が受け止めた感じは、①良い印象を受けたもの（81件）、②中立（事実を述べている）的なもの（23件）、③良くない印象を受けたもの（15件）の大きく3つに分けられ、その中をさらに細かく分けて考えることができた。（「」内は回答例、以下同様）

(1) 良い印象を受けたもの

- a. 教室の雰囲気：「教室の雰囲気が良い」「感じが良かった」「落ち着いた雰囲気」
- b. 子どもの様子から：「ためらうことなくすんなり」「子どもが気後れせず」「抵抗無くとけ込めた」「本人の生き生きとした良い表情が感じられる」「すぐ慣れた」「本人も意欲的」
- c. 保護者への対応から：「励まされ勇気づけられた」「頼もしかった」「心の緊張がほどけた」「子どもの状態を詳しく聞いてください」「親身になって／熱心に／真剣に／話を聞いてくれて」「きちんと説明してください」「気持ちを軽くしてくれた／ゆったりとした気持ちになった」「いろいろと教えられることが多かった」
- d. 担当者の様子から：「何でも話せる雰囲気／気さくに話してくださって」「詳しい説明をしてくれて」「一生懸命子どものことを考えててくれて」「子どもの性格をよく分かってくれて」「暖かく迎えてくださった／笑顔で優しく接してくれて」「てきぱき指導してくださり／いろいろなアドバイス」

(2) 中立的なもの

- a. 子どもの様子：「慣れるのに時間がかかった」
- b. 保護者自身の状況：「先生のちょっとした言動にも敏感になっていた」「普通の学級とは先生の接し方が随分と違うと感じた」「子どもの考えを優先する考え方によどいを感じた」「私と担当の先生と話をして過ぎていったが自分の気持ちが楽になった」

(3) 良くない印象を受けたもの

- a. 子どもの様子から：「初対面のためか少し物怖じしていたように思う」「不安そうで離れなかつた」「本当に言葉やコミュニケーションの取り方が改善されるか疑問だった」「緊張していくなじめず」
- b. 保護者のおもい：「帰りが遅くなるのが少々不満」「病院ではなく学校の先生なのでちょっと心配」「不安があって緊張した」
- c. 担当者の対応から：「本当にことばの勉強になるのかしら？」「『これで、授業？』と思った」「優しすぎると心配した」

2) 担当者との話し合いの中で傷つけられた言動

「お子さんが通っている『きこえことばの教室』の担当者とのかかわりの中で『傷つけられた

なあ』『ショックだったなあ』『こんなこと言われて嫌だったなあ』と思った言葉や行動がありましたらお書き下さい」という質問に対して108名の回答のうち87名は該当することはなかったという回答であった。該当する回答があったのは21名で26件の内容であった。

これらの回答は、①言われたこと（17件）、②指導体制（5件）、③担当者の態度（4件）の大きく三つに分類でき、その中をさらに細かく分けて考えることができた。

(1) 言われたこと

a. 子どもの障害や実態

これは、子どもの障害や実態を伝えられショックを受けたというものである。回答例としては「事実を言われてちょっとショックでした」「『知的に障害がある』とはっきり言われたときは、とてもショックでした」「『ここまで我を通すのが理解できない』と言われた」「子どもの『僕はどうも友達から嫌われているみたい』のことばに対して『嫌われて当然』といわれた」などであった。

b. 将来について

これは、今後の子どもの姿をいわれて、ショックを受けたと言うものである。回答例として「小学校6年生まで通級しても治らない子もいると言われたこと」「吃音は直らない」などであった。

c. 保護者自身のこと

これは、保護者自身のことが話題になり、保護者が自分に非があると感じてしまった内容である。回答例として「『おかあさんがおちついているから今、ほらみて〇〇くんも落ちついてきますよ』というように親の事が少し話に出てくると自分を責めてしまいました」などであった。

(2) 指導体制

a. 指導形態・内容について

ここでは、指導形態や指導内容について、傷ついたというより不満な内容と受け取ることもできる。回答例としては「通級に来られる方が増え、これまでのように1対1の指導がなく、何人かでわいわいがやがやと遊んで終わりというのに果たして発音の指導になっているのだろうかと疑問」「ことばのおくれで通級していますが、ことばがけしてくれる事はなく、あいづちだけです」等であった。

b. 担当者の交代

担当者の異動等による交代で傷ついたという内容である。回答例として「何年も子どもにかかわっていただいた先生とのお別れはショックだったみたいでした」「先生とのウマ、意見の合わない人もいて、何度も泣いて帰ったという親もいます」のであった。

(3) 担当者の態度

この内容は、担当者の対応で、保護者が傷つけられたと感じているものである。回答例として「親の話を全く聞こうとしない」「『新年度の通級時間は4月になったら電話連絡します』と言われたのですが、電話はかかりませんでした。置き去りにされたような気持ちでした」「他のお母さんを紹介されるとき子どもさんのことを細かく話される。私のこと、息子のことと同じように話さ

れているのかと思うとあまりよい気はしない』等であった。

3) 担当者との話し合いの中で励まされた言動

「きこえことばの教室の担当者に『元気づけられたなあ』『励まされたなあ』と思った言葉や行動、『安心できた』『ほっとできた』ということがありましたらお書き下さい」という質問に対して126名中121名から、118件の回答があった。

その回答の内容は、①話してくれたこと（60件）、②担当者の対応（32件）、③聞いてくれること（21件）、④連絡調整（5件）の大きく5つに分類でき、その中をさらに細かく分けて考えることができた。

(1) 話してくれたこと

a. 子どもの良い点

回答例としては「私が子供の短所、欠点と思えることを言っても、良い解釈をしてくれ、つられて私も少し子供に対して優しい気持ちになれました」「本人の良い所を見つけてほめてくれた時」などであった。

b. 子どもの成長

回答例としては「親でも気がつかなかつた細かいことなどを話してもらえた」などであった。

c. 子どもの見方

回答例として「物事に対する見方が一方的なことがあるので、先生にいろんな方向からの見方、価値観を教えていただいて、肩に入っていた力が抜けて楽になることがあります」などであった。

d. 保護者への励まし

回答例として「『大丈夫ですよ、一緒に頑張って行きましょう』といわれて安心しました」「子どもの言葉の遅れで悩んでいた私に他のお子さんと比べるのではなく、お子さんにはお子さんのペースがあるのですから、あせらず見守ってあげて下さい」という言葉に励まされました」などであった。

e. 保護者への助言

回答例としては「いろいろなアドバイスをもらって今まで気づかなかつた部分を教えてもらつた」「ことばの相談に対してきちんと自分の意見を言って下さるのでとても助かります」などであった。

(2) 担当者の対応

a. 保護者に対する態度

回答例としては「言葉で印象に残っていることはありませんが、毎回笑顔で迎えて下さるので、本人も親も安心していられるという感じでした」「毎週一喜一憂する私にいつも親切に指導して下さり、共に喜んで下さる。いつも優しさをいただけるので、子どもよりも私の『精神安定剤』のような存在でいて下さっています」などであった。

b. 子どもへの接し方や指導

回答例としては「子供と真剣に向かいあい子供の心と身体の両面から言葉の指導をうけていることがわかり安心しています」「いつも笑顔で迎えていただき、娘も週1回の教室を楽しみにしています」などであった。

(3) 聞いてくれること

a. 保護者自身の話

回答例としては「自分(私)自身の悩みをきいてもらってアドバイスをしてもらった時などほっとできました」「家庭での出来事や私の身体の事など相談にのってくれました。話す事で自分が落ち着いたと思う」などであった。

b. 子どもに関する悩み

回答例として「子どもについての悩みを全て聞いて下さったので、本当に第一子を育てる事への不安はどんどん軽くなった。何より子どもと親の心のケアをしていただいたように思います」などであった。

(4) 連絡調整

回答例として「担当の先生がたびたび在籍学級に顔を出してくださり、学校の様子も知らせてくださるので、常に安心しています」「2年生の時、子どもにチック症が出たけれど、在籍校の担任とことばの教室の担当者で連絡を取り合い乗り切れた」などであった。

4) ことばの教室でよかったですと思われる施設・設備・教室環境等

『きこえことばの教室』で『これは良かった』という施設や設備、教室環境、行事、連絡方法などがありましたらお書き下さい」という質問に対して、97名から、106件の回答があった。これらの回答は以下の5つに分類できた。()内は記述件数を示す。

- a. 教室環境：きれい・明るい等 (6)、掲示・壁面構成 (6)
- b. 連絡方法：おたより (10)、連絡ノート (2)
- c. 施設設備：プレイルーム (4)、大型遊具 (7)、遊具・玩具 (18)、本 (4)
- d. 行事：お楽しみ会・野菜の収穫・キャンプ等 (38)
- e. 保護者向け：学習会・保護者会・陶芸教室・集まり等 (11)

上に示したように教室の雰囲気を醸し出す教室環境に保護者は関心を持っていると共に、連絡方法や行事などの担当者や保護者同士で交流できる機会も重要であると感じている。

5) 今の担当者や担当者との関係

「今、担当者や、担当者との関係について感じていることをお書き下さい」という質問に対して、112名からの回答があった。

この項目は記述内容から、①良好な関係 (97件)、②不満や要望 (14件)、③その他 (1件) に分類できた。「①良好な関係」は、「安心・信頼」「子どもの成長」「保護者の相談相手」の内容に、「②不満や要望」は、「指導内容・方法」「指導体制」「子どもの見方」「保護者の対応」の内容に分

類することが出来た。それぞれの具体例を以下に示す。

(1) 良好的な関係

a. 安心・信頼：「子ども、保護者ともに安心している」「娘もよろこんで通っているので、このままでよいかと思っています」「担当者の先生と信頼関係もでき本当によかったです」と思っています」「担当の先生のことを子供は信頼している様子。私自身も安心して通わせることができてうれしく思う」「担当の先生を信頼しており、良好な関係が在ると思っています」

b. 子どもの成長：「この一年半ですべて会話する事がスムーズになり、自分の要求を言葉によって表現する様になり、パニックの状態がなくなりました」「子供の興味のある物を中心に勉強を取り入れ、手作りの勉強にはいつもありがとうございます」「大変良い関係だと思います。アドバイスも的確で何より子どもの成長を第一に考えて下さいます。とても頼りにしています」

c. 保護者の相談相手：「子どもの発音の状況はとてもよくなり、むしろ子育ての相談にのっていただいているような状態でとても信頼しています」「子どもの発音訓練より今は母親の心配事、心のケアに重要な役割を果たしているように思う」「ことば」だけでなくいろいろなことでも相談できますので心強いです」

(2) 不満や要望

a. 指導内容・方法：「指導の様子を見ることがないので、具体的にどんなことをしているのかがよく分からぬ」「指導内容やその指導の意味の説明が全くないので、我が子の現状もあまり把握できません」「もっと障害児の事も勉強して欲しい」「もっと指導らしい指導（ただ遊ぶのではなく）をしてもらえたうらうらと思います」

b. 指導体制：「1クラスの人数が5人くらいの時があり、子どもの状態もまちまちで手のかかる子どもにかかり切りになり、教室運営がうまくいかないのではと感じるときもあります」「担当者についてはないが「ことばの教室」があまりにも知られていないことが残念。通級するのに1年近く後になったので、システムの改善を望みたい」「人数があまりにも多くて個別指導は無理な状態はよく分かっているのですが、一人一人通っている理由が違うので、みんなで遊んでいる中の指導には無理があり、良くなるにも時間がかかるのではないか。個人個人に合った指導はできないものだろうかと少し不安に思っています」「教室の休みが多く、訓練が途中で分断されてしまうのが残念です」

c. 子どもの見方：「先生から見た子どもの様子を教えて欲しいです」「子どもの発音がどこまで治るのか、本当にはつきり話せる様になるのか、あまり治らないのか、その詳しい事は話した事はなく、通い始めてから3年くらいですが、発音はほとんど変わらず、いろいろな訓練をしていますが、どういう事に良いのかわからないけど聞けずにいます」

d. 保護者への対応：「私たちにできることが在れば、率直に言っていただきたいです」「一方的に話す。健常の子とは違うのに一般的な保育論を押しつける」「親の意見は否定され、私は泣く泣く指導から帰っています」

IV. 考察

保護者の生の声を整理して報告した。話題となった内容は、大きくとらえて、担当者の子どもへのかかわり方、子どもの様子や表情、保護者への対応、指導に関することから受けとめた保護者の気持ちであった。ここでは、①通級しはじめたころと現在の保護者の気持ちの比較、②担当者の言動で励まされたことと傷つけられたこと、③保護者のおもいから考えられる担当者が配慮することの3点について考察する。

1. 通級しはじめたころと現在の保護者の気持ちの比較

アンケート調査の質問項目①と⑤の回答から、通級をしはじめたころの保護者の気持ちと現在の保護者の気持ちを比較すると、表1のようになる（無記入は中立にカウントした）。いずれの時にも良い印象を持った保護者が多く、悪い印象を持っているのは、通級しはじめた頃も現在も約13%である。

表1 通級し始めた頃と現在の気持ちの印象の変化

	通級し始めた頃の気持ち	現在の気持ち
良い印象	81 (10)	97
中立	30 (1)	15
悪い印象	15 (3)	14

表1の中で通級し始めた頃に良い印象を持った81名のうち、現在も良い印象を持ち続けている保護者は65名、通級し始めた頃は中立的な気持ちを記述していた24名のうち、現在は良いと感じている保護者は23名、通級し始めた頃は悪い印象を持っていた15名のうち現在では良いと感じている保護者は9名である。一方、最初に良くない印象をうけ現在も良くない印象を持っている保護者は3名、通級し始めた頃に中立的な気持ちでいたが現在は悪い印象を持っている保護者が1名、通級し始めた頃に良い印象を持ち現在は悪い印象を持っている保護者は10名である。

悪い印象を持ち続けている保護者3名の意見は、次のようにある。通級当初は「帰りが遅くなるのが少々不満」という物理的な問題を感じていたが、現在では「時にプライバシーに立ち入られたくないと思ってしまうこともあります」と心情的に不満を感じている保護者、「はっきりと物事を言う先生で言われたときはぐっとこらえたが、後から泣きたいくらいつらかった」という当初の気持ちから「具体的にどんなことをしているのかよく分からない」と指導の内容に関しての不満を現在は持っている保護者、「先生はお手本を示されているのだと思い、緊張して指導を受けていた」という当初の気持ちから「親にもできることがあれば、率直に言って欲しい」という対応の不満がある保護者である。後者の二人は、指導内容についての説明が十分に行われていないことが原因であるということが分かる。

また、当初は悪い印象であったが現在は良い印象を感じている9名の保護者は、次のように感じている。当初は「子どもがなじめず教室はやめようかと思った」「本当にことばの勉強になるのかしらと思った」「病院ではなく学校の先生なので大丈夫かなと思っていた」等のおもいがあった

が、「①②（アンケート項目番号を示す）で書いたことを感じてもなお、熱意と愛情は十分に伝わり、感謝している」「頼りになる相談相手です」「信頼しています」と感じている。良い印象に変わっている要因は、担当者の一生懸命さと熱意が影響しているように思われる。

このように、保護者心境の変化を追ってみると、当初の悪い印象は、ことばの教室の情報を知らないことからくる不安や緊張が考えられるが、通級するにつれて、担当者の一生懸命さや熱意を感じ、担当者に信頼を寄せてくるようになると思われる。しかし、担当者に感謝しつつも保護者には要望もあり、その内容の多くは、指導内容や方針の説明である。これらのことから、子どもに対する指導方針や内容の確認は、十分に行なうことが重要であると考えられる。

2. 担当者の言動で励まされたことや傷つけられたこと

アンケートの②と④的回答から、担当者の言動で励まされたことや傷つけられたことを踏まえて、保護者が担当者とのかかわりをどのように進めていくのかを検討する。

保護者が傷つけられたと感じた言動の最も多かった回答は「言われた」としたものであり、回答者の6割以上が記述していた。一方、保護者が励まされたと感じた言動で最も多かった回答は「話してくれた」と記述したものであり、その回答も回答者の半数を占めた。保護者が「言われた」と表現していることと「話してくれた」と表現していることは、担当者が保護者に話をすることでは、同じ行為である。しかし一方では傷つけられ、他方では励まされている。その違いは、担当者が話した内容そのものに関することと、保護者がどのような心理状態の時にどのように言われたのか、という二つの要因があると考えられる。

担当者から「言われた」、すなわち保護者が傷つけられたと感じたのは、子どもの障害や実態、将来性、保護者自身のことに関して、マイナス面の指摘や否定的な発言であった。一方、担当者が「話してくれた」、すなわち保護者が励まされたと感じたのは、子どもの成長や良い点であったり、保護者への助言であったりした。久保山・小林（2000）⁵⁾が指摘しているように、保護者との話し合いでは、子どもや保護者のマイナスの部分を指摘するのではなく、プラスの部分や具体的な目標や手段を伝えていくことが大切である。

また伝える内容が同じであっても、保護者自身の心理状態によっては保護者の受けとめ方が異なることもある。保護者の心情を推し量り、タイミングを見計らって話をしていくことが大切である。これは保護者への対応マニュアルや方法論を学ぶことだけで解決するものではなく、経験を積んだ中から習得されていく担当者の感性と直感に委ねられる部分があると考えられる。

傷つけられたこととしてあげられている「担当者の交代」や「指導形態」は、担当者の努力だけでは改善が難しいものである。また、担当者が子どもや保護者に接する姿、保護者の話を聞いてくれること、通常学級との連携をとってくれたことに対して保護者は安心したり、励まされたりしていた。これらの言動は、すべて担当者の努力が実を結んだものと考えられる。

3. 保護者のおもいから考えられる担当者が配慮すること

今回のアンケート結果から担当者が教室運営や保護者とのかかわりで配慮することとして、以下のようなことが考えられる。

(1) これまでの保護者の姿勢を認める

調査結果の中に「親の事が少し話に出てくると自分を責めてしまいました」という回答があつたように、担当者が保護者を否定するつもりのないアドバイスにさえも、保護者は自分が批判されているように受け取ってしまうことが考えられた。ここに担当者と保護者とのおもいのずれが生じるのである。担当者がおもいを馳せなくてはならないことは、保護者が抱えているストレスや、担当者と出会うまでに過ごしてきた不安定な気持ちであろう。

たとえば滋賀県で実施された「障害児をもつ子どもたちの生活実態調査」¹⁾では、家庭における障害児の主な介助者は、その7割が母親であるという結果が示されている。また、障害児のいる家族、特に養育の中心的役割を果たしている母親はより多くのストレスを引き受けているといわれている。

本調査やこれまでの調査・研究の結果を踏まえると、保護者は多くのストレスや不安な気持ちを抱えて生活してきており、それに対する理解を示し、共感的な態度で保護者に助言することが大切であると考えられる。久保山・小林（2000）⁴⁾は「保護者を責めることなく、保護者の今、子どもの今を肯定することが大切である」と述べているが、これまでの子育てに対して不安を抱えている保護者に対して、子育てに関することばを慎重に選ぶこと、これまでの子育てに関する保護者の努力を認めること、今後の子育てに対する希望を失わせないような発言が大切である。

(2) 保護者と担当者との間で方針を確認する

本調査の結果では、保護者は担当者に感謝しつつも要望がある。その要望の多くは、指導内容や方針の説明であった。また、保護者が傷つけられたと感じた言動の中にも「指導形態や内容」に関するものがあった。これは保護者の不満とも受けとめられるものである。家族や子どものニーズはさまざまであり、それを考慮した対応が望まれている。

これらの不満を防ぐためには、子どもを見る観点を保護者と共通理解し、保護者が求めている支援を確認していくことである。調査結果で述べられていた「子どもの見方・成長・良い点等を話してもらって励ました」という回答を踏まえると、子どもの成長の可能性等を保護者に伝えるとともに、担当者が考えている指導の方針や内容を説明していくこと、さらに保護者はどのような支援を求めているのかを聞き、両者の考え方のすりあわせをすることが大切である。

また、通級が継続すると、保護者は教室に慣れ、担当者の様子が分かるようになる。担当者の一生懸命さや熱意を感じ、担当者に信頼を寄せてくるようになることが多い。担当者にとって「ことば」に関する専門性や技術は重要であるが、子どもに向かう姿勢や熱意も保護者は感じ取っていることを担当者は心に止めておく必要がある。

(3) 適切な情報提供をする

a. 保護者同士の交流から

筆者らが以前に保護者に対して行った調査結果²⁾では、「ことばの教室」は、保護者同士の交流の場としての良さがあるとしていた。例えば、「同じ悩みを持つお母さんとの交流が良い」「保護者同士の交流があるので一人で悩むこともない」「情報交換ができる」などであった。ま

た、大日向（2000）⁶⁾は育児に不安や悩みを抱えている多くの母親は、孤立感を抱いて生活していることを指摘し、同じ悩みを持っている人と知り会うことでも孤立感は解消されるとしている。

保護者同士間で、子育ての工夫や学校の情報等を交換することにより、我が子の障害とその将来について理解を深めていくことになると同時に、保護者の孤立感の解消にもつながっていく。保護者はこの過程を経ることで精神的に安定していくことが考えられ、担当者は保護者同士で交流するという場面を設定していくことが重要である。本調査の「ことばの教室」でよかったですと思われる施設・設備・教室環境等の結果でも、「行事」が最も多くあげられており、親子で楽しめ、交流を深められることの良さが示されている。

b. 担当者から

保護者同士の交流から得る情報だけでなく、担当者から提供される情報も重要である。障害に関する一般的な情報は、現在では手軽に入手できるようになっているが、その子どもの特徴や見方は、実際にその子どもと接した担当者や専門家でなくては提供できないものである。

また障害児に関する医療・福祉・教育に関する一般的な内容についても、適切な範囲で情報を伝えていくことが重要である。療育手帳を取得することによってサービスが受けられる等の担当者にとっては当たり前と思っている情報も、保護者は知らないことがある。このような行政や制度に関する情報を保護者に伝えていくことは大切であるが、担当者が提供する情報は、多ければ多いほど良いというものでもない。保護者のニーズを踏まえ、適切な時期に適切な内容と情報量で保護者に提供していくことが重要である。

c. 教室からの発信

保護者が通級はじめたころに持つ印象は、「ことばの教室」について十分に知らないことからくる不安や緊張であると考えられた。筆者は相談場面で「ことばの教室」を知らない保護者に出会ったことがある。まずは「ことばの教室」が世間に知られ、通いやすい場になることが重要である。このためには、「ことばの教室」に関する情報の発信や啓発が必要である。「ことばの教室」のパンフレットを作成し、病院や保健所に配付したり、就学時健診や入学式に配布したりする工夫も大切である。

VI. おわりに

「ことばの教室」担当者と保護者とのかかわりとは、子どもの実態、指導方針、医療・福祉・教育・行政に関する情報等のやりとりをするだけではなく、そのやりとりを通してお互いが様々な認識を共にしていく過程ではないかと考える。それは、子どもの指導や保護者との面接や懇談など「ことばの教室」での教育のあらゆる場面を通してなされていくものであろう。

保護者への対応には、失敗しない確実なマニュアルが存在するわけではない。保護者の声を真摯に受けとめ、個々の実践事例を通し、そして事例報告を学ぶことで経験を補い、保護者のおもいをくむことのできるような担当者の感性を磨いていくことが重要なことではないだろうか。

謝辞：本研究に関する調査に協力下さった保護者の方々、また保護者への協力依頼と調査用紙の配布をご協力下さった難言教育担当の先生方に感謝いたします。

<文 献>

- 1) 藤本文朗・黒田学：障害児と家族のノーマライゼーション－滋賀の「障害をもつ子どもたちの実態調査」からー，群青社. 1999.
- 2) 小林倫代・久保山茂樹：地域における早期からの教育相談の場としての「ことばの教室」の役割，国立特殊教育総合研究所研究紀要, 28,11-21,2001.
- 3) 小林倫代・久保山茂樹：障害児の早期からの教育における保護者支援，国立特殊教育総合研究所研究紀要, 26,111-118,1999.
- 4) 久保山茂樹・小林倫代：保護者の「語り」から考える早期からの教育相談. 独立行政法人国立特殊教育総合研究所 教育相談年報, 21,11-20,2000.
- 5) 久保山茂樹・小林倫代：障害児の早期からの教育相談における保護者対応－通級指導教室の保護者への調査からー. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 27,23-33,2000.
- 6) 大日向雅美：子育てママのSOS. 法研, 2000.
- 7) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議：今後の特別支援教育の在り方について(最終報告), 2003.

<資 料>

保護者と担当者とのかかわりについてのアンケート

- お住まいは? _____ 都道府県 _____ 市町村 (よろしければ学校名 _____ 学校)
●お子さんは現在 小学校 _____ 年生 (男・女)
●教室に通い始めて _____ 年 _____ ヶ月
●教室に通っているのは? きこえ・発音／口蓋裂／吃音／ことばのおくれ／その他 ()

①お子さんが「きこえことばの教室」に通い始めたころを振り返り、担当者とかかわるときに感じたことをお書き下さい。

②お子さんが通っている「きこえことばの教室」の担当者とのかかわりの中で、「傷つけられたなあ」「ショックだったなあ」と思うこと、または、あなたが「こんなこと言われて嫌だったなあ」と思った言葉や行動がありましたらお書き下さい。

③「きこえことばの教室」の担当者に「元気づけられたなあ」「励まされたなあ」と思った言葉や行動、「安心できた」「ほっとできた」といったことがありましたらお書き下さい。

④「きこえことばの教室」で、「これはよかった」という施設や設備、教室環境（掲示物、教室だよりなど）、行事、連絡方法などがありましたらお書き下さい。

⑤今、担当者や、担当者との関係について感じていることをお書き下さい。